

イワシの頭も信心から

二の黒高志

の和泉さんが呆れ顔で立っていた。

「人通りが少ない場所とはいえ、道の真ん中に突つ立てる」と、さすがに邪魔なのよね」

普段通りのわざとらしい辛辣な言葉。和泉さんは同じ学部の先輩で、確か民俗学を専攻していたはずだ。女性にしては短めの茶髪、ヒールを履かなくても十分な背の高さ、整った顔立ち。よく僕を振り回す先輩の一人であり、僕の大学生活のプラス要因でもマイナス要因でもある。

「いえ、今さつき黒猫が通りかかる。あまりにも綺麗だったんで、少し見とれていたんです」

とさせていき、少しずつ景色と同化して消えた。

「君、何をぼうつとしているの？」

後ろから声をかけられ、振り向く。そこには先輩

すると和泉さんはその白い頬をひきつらせた。

「……君、あまりに現実の女の子にもてないからつて、猫まで守備範囲に入れたのか。恐ろしい奴なのね」

「ちょっと待ってください。誤解を招く発言はやめてくれませんか？」

僕はあわてて否定する。さすがの僕でも猫にまで発情したりしない。

「それよりも……黒猫ね。君はこの学校で黒猫に逢

うことが、どういう意味か分かっているの？」

先輩は表情を曇らせる。僕がこの大学に通いだして半年が過ぎていた。これまでの間にいろいろな人も話をし、この先輩にいろいろと振り回され、いやというほどの経験をしてきた。だから僕にも思い当たる節はある。

「まあ、一応は。『この学校で、黒い猫が目の前を横切ると、その人は不幸になる』という話ですよね」

僕は世間話をするつもりで話した。和泉さんはそ

れを聞くとおもむろに僕に近づいてくる。

「君は半年も私に付きまとつていて、その程度の認識なの？嘆かわしいわ。それなら改めなければいけないわね。今すぐ私についてきて」

いつのも「とく自分勝手な先輩だ。そもそも付きまとつたのではなく連れまわされたの」という点で誤解がある。それに、僕にだって都合とか予定がある。

「でも先輩、僕はまだ授業が残っているのですが」

「知らない」

そういうって先輩は僕の腕をつかみ、そのまま引きずつて行つた。相変わらず勝手すぎるだろ。

着いた先は第二食堂だった。ここはいわゆる学生食堂とは違つてカフェテリアといった趣がある。だからメニューもそれなりの値段で展開している。和泉さんは僕の向かいに座り、教育料として僕におご

らせたコーヒーを飲んでいた。ぼくは水である。たしかに比較的静かな場所であるために、ワイワイ騒ぐことが目的ではない僕たちにとつては都合の良い場所ではあるのだが。

「この学校で黒猫に逢うことは、そんなに簡単に済ませていい話じやないの」

和泉先輩は切り出した。僕は先輩の形の良い胸から目をそらし、薄紅色の唇に目をやつて聞いた。

「昔、学生闘争のあつたあの時分。この大学のとある教授が、自分の研究室で猫を飼っていたらしいわ。

それはきれいな黒猫だったそうよ。その猫は校舎内を徘徊し、当時の学内ではアイドル的な存在だった。

けれど不幸なことに、一部の心無い学生に散々に虐待され、挙句死んでしまった。当時の学長はその犯人たちに退学などの重い処分を下し、猫の靈を供養。

飼い主だった教授も齢だったのか、引退。それでこの話は悲しい結末とともに終わるはずだった」

先輩はふと目を落とした。カップの中をゆっくりとスプーンでかき混ぜている。この先輩は一つ一つの動作が洗練されていて、ほんの小さな動きだけで人の目を惹いてしまう。

「はずだつた、というのは?」

僕の問いかけに、先輩はニヤリとする。よくぞ聞いてくれた、と。先輩は目を僕に向けなおして続けた。

「けれど、その後も学内で黒猫を見かけたという人がたびたび現れた。おかしな話だよね、教授の飼っていた黒猫は死んでしまったというのに」

「見間違いで? 別の黒い猫がまぎれこんでいただけとか?」

僕は当然の疑問を投げかける。

「話を聞いた人たちも当然、そのことを思つただろうね。けれど、当時の人たちは『間違いない』と言つたの。『あの黒猫を見間違えるわけない』とね」

「それ、なんだか変な話ですね。でもそれがさつき

話とどうつながつてくるんですか？」

僕は少し身を乗り出した。この話が面白くなつて

きたのはもちろん、先輩の話し方、呼吸の間、そういつたものにひきつけられてもいた。まあ、こうやつていつも騙されているはずなんだけどね。

「まあ、そう話を急かさないでよ。……そう、見かけただけでは終わらなかつた。見かけた人たちが次々と不幸な目にあうようになつたの。大きなことから小さなことまで、さまざま不幸が彼らに襲いかかつた」

「先輩、たとえどんなことが起こつたんですか？」
なんだかいやな予感がしてきた。それなら僕はどうなつてしまうのか。

「たとえば、そうね……。私が聞いた話だと……」

先輩は目が笑つていない。

「財布を失くす、レポートを紛失する、家の鍵を失くす単位を落とすエトセトラエトセトラ」

僕は少し拍子抜けした。

「……その程度ですか？」

「甘い、甘いよ。交通事故、落雷、放火に一家離散。自殺、ビルの崩壊、エレベーターの落下。入院はもちろん人によつては命に関わることも」

少し背筋が凍つた。単に死んだはずの幽霊猫にあつただけでそんな目にあつてはたまらない。

「先輩、そんなのつてただの迷信じやないですか？ 信憑性も低いですし。必ず不幸になるつて話じやないんでしょう？」

よくわかつたね、と言いたげにうなずく先輩。
「そ、黒猫を見た人の全員が不幸な目にあつたわけじゃない。なぜだかわかる？」

「それは……わかりません。先輩の口からお願ひします」

予想もつかないわけじゃない。けれど先輩が目を爛々と輝かせ、話したくてうずうずしている様子を

見ていると、正解を言つてはいけないような気がしてしまった。

「まったく、そんなこともわからないの？」
先輩は少し嬉しそうだ。

「なら教えてあげる。黒猫が死んだ直後だつたらそれがどんな猫だったのか、多くの人が知つていただろうし、見間違えるわけはない。そう、当時その猫を見たことのある人たちなら、だけどいくら有名とはいえ、たかが猫一匹。学内全員がその猫を見たことはある、なんてあるはずない。ましてや直接見たことのない人たちなら、噂くらい聞いていれば、学校の敷地内であつた猫を『あの有名な猫だ。間違いない』と結びつけることもあるでしよう。だから何人かは紛れ込んだ黒い野良猫を見間違えていたはず。そしてその猫がいたのはもう何十年も前的话よ？ 今となつては当時のその黒猫を見たことある人間なんて、この大学にいるはずないじやない。

だから単に黒い猫を見ただけで、大騒ぎするような輩も大勢いるってことなのよ。そして重要なのはこれ、幽霊黒猫を見なかつたからと言つて、不幸にならなかつた、とは限らないということ

そこで先輩は一息ついて、すっかり冷めたコーヒーを一気に飲み干した。

「わかる？ 幸や不幸なんかね、その人の心持ち次第でいくらでも流転するのよ！ 災い転じて福となす、とも言うでしょ？ イワシの頭も信心からって言うけど、そんなつまらないことをさぞ大げさに言い伝えて、自分の失敗や不注意、不幸を幽霊猫のせいにするしかないなんてかわいそうもいいところよ！」

途中から完全に迷信を否定にかかつた先輩。いつたいなんなのだ。

「先輩は、その、幽霊黒猫の噂話を信じているんですか？」

先輩は身を乗り出して、僕のグラスをひつたくり、中の氷まで飲み干した。目は僕に据えたまま、唇を手の甲で拭つた。

「いいえ、ほとんど信じてないわ。不幸な目にあつた人、それこそ入院までしてるような人たちには、黒猫を見たと言つてる人たちもそれなりにいるのは確かなんだけれどね」

さあてね、と先輩は頭を振つた。

「実際にその幽霊黒猫は、出会つた人を不幸にすることができるのかも知れない。けれど、私はその猫をまだ見たことがないし、あなたが見たという黒猫がその幽霊なのかもわからない。だからいるかどうかも分からぬし、信じていないとしか言えないわ」

僕は生唾を飲み込んだ。確かに幽霊黒猫の話はただの噂話で、たいしたことはないのかも知れない。けれど、普段ならそんなことが起きるなんて意識もないし、警戒だつてほとんど無意識なはずなのだ。

大きな不幸が訪れるかもしないという不安は、確実に僕を圧迫していた。

「まあいいわ。これであなたにどんな不幸なことが起ころのか、それを見て確かめて、きっと論文にまとめ上げてみせるわ！」

僕には先輩が何を言つてゐるのかわからなかつた。論文？

「先輩、論文つてどういうことですか？」

しまつた、と言わんばかり変化した先輩の表情。「だつて先輩はそんな迷信は信じてないんでしよう？ それなのに先ほどから僕の不安を煽つたり、それでいて僕を励ましてゐるみたいだつたり。どういうつもりなんですか？」

勢いでついしやべりすぎたらしく、先輩は一気にまくしたてた。

「ち、違うのよ？ 私は単に話をしておくのも必要かなあと思つただけで、別に『身近な伝承と心理』

というテーマで民俗学の論文を作成しよう、なんて

……

考へてはいるわけではないの！ そこのあたりを勘違
いされては困るのよ！」

僕は生ぬるい視線で先輩をにらんだ。この人はク
ールなお姉さんらしく振舞うことを忘れ、頬を赤く
染めていた。

「つまり、僕を論文のネタにするためにわざわざ捕
まえて、長話に付き合させたんですか。裏ではそん
なこと考へていたんですね」

「私は裏表のない素敵なお人よ？」

「自分で言つてたら世話ないです」

わざとらしく目をそらす先輩に、僕は大きくなため息
をついた。

「まったく、他人の不幸は蜜の味、とは言いますけ
どね。あなたという女性はホントに迷惑な人ですよ
ね」

「ホントは私と一緒にいられて嬉しかったくせに

危うくなつた形勢を逆転すべく、普段以上に僕をか
らかおうとする先輩。でも先ほどの余韻が残つてい
るのか、顔は赤いままだ。

「ちよつといい加減にしてください」

普段の力関係では到底できないような強い態度
をとると、先輩は途端にしゅんと小さくなつた。可
愛いから許しますけどね。

「それで、僕はこれからどうすればいいんですか？」
すると先輩は目を大きく見開き、瞳を輝かせ、元
気を取り戻した。表情がころころ変わるので、正直、
見ていても飽きない。

「存分に不幸な目にあつてくれればいいわ。水難、
火難、拳銃に女難。あなたがどれだけ苦しんでくれ
るかどうかで、この迷信が正しいのか妄言なのかが
わかると思うの。そうすれば私の論文が完成し、あ
の禿げた教授にぎやふんと言わせることができる

わ！」

「女難の相ならすでに出でているんですがね」

「そんなことないわ。私のような親切で美人な先輩が近くにいるというだけであなたは幸せの一端を手にしているの」

そんなわけあるか、と内心で毒づく。

「それじやあね。思う存分不幸になりなさい、私のために」

それだけ言うと和泉先輩は席を立ち、僕に背を向けて優雅に去っていく。僕は彼女の背中や髪の影から見える首筋を眺めてから頭を抱えた。

すると、僕の目線の先、足元のあたりを「ざまあみろ」とでも言いたげに、黒猫が優雅に歩いて行つた。歩いて行つて、霞となつて消えた。

和泉先輩は今日も元気だ。